

朝鮮時代「平生図」の成立と中人文化

——「男子歌」・「남자가」（「男子歌」）・「男児歌」との相関関係を中心に——

金 貞 我

KIM Jeong Ah

非文字資料研究センター元研究員 神奈川大学経営学部非常勤講師

【要旨】 本稿は、朝鮮時代の17世紀後半から本格的に制作される風俗画の中で、士大夫の一生の出来事を描いたとされる「平生図」を取り上げ、その成立と享受における再解釈を試みるものである。従来の先行研究では、「平生図」は両班官僚の一生を絵画化した「士人風俗画」として扱われ、豪華な通過儀礼の描写と両班官僚の段階的出世の表現から、朝鮮後期の京華士族が享受する世界を表現した風俗画として評価された。

しかし、本稿は、朝鮮時代後期の19世紀の制作とされる「平生図」の成立には、「郭汾陽行楽図」のような吉祥図の影響や19世紀に流行したハングルの長編歌辞作品、特に「男子歌」や「男児歌」、『漢陽歌』などとの関連がきわめて重要であることを指摘した。即ち、「平生図」を構成するイメージは「男子歌」や「男児歌」の文脈から導き出され、最も理想的な立身出世を成し遂げた男子の一生として表現される。なかでも「男子歌」や「男児歌」は、『漢陽歌』と共に19世紀以降の漢陽の中人階層の生き方や現実認識、そして遊興の文化を表すものとして注目されるが、「平生図」はこれらの中人文化を基盤にして生成された絵画であったことがうかがえる。

そして、「平生図」にみる官職への願望は、巨大な富を築き、新たな経済的な権力集団として台頭し、物質的な豊饒を謳歌していた閭巷人、即ち中人階層が描いていたものと想定できる。「平生図」を享受していた階層は、都の漢城を背景としながら、物質的消費の上に奢侈で洗練された教養も持ち合わせていた閭巷人（中人）であり、彼らの求める理想的な一生を視覚化し、享受したのが「平生図」であったと考えられるのである。そのイメージは彼らが理想とする五福を備えた人生として最高の官職に上り詰めた姿であり、そこに感情移入し、理想と欲望が叶えられることを祈願する祈福のモチーフとして鑑賞する絵画であったといえよう。

The Formation of the Paintings of Man's Ideal Life, *Pyongsaeing-do*, and the Culture of Middle Class

Abstract : This paper focuses on reinterpretation regarding the formation of the Paintings of Man's Ideal Life, *Pyongsaeing-do* (平生図), and the stratum of the painting beneficiaries, which has been regarded as the genre paintings of aristocratic class, *yangban*, depicting the images of glorious rite of passage and the successful life of bureaucrat.

This paper, however, points out that as to the formation of the Paintings of Man's Ideal Life which was mainly produced in the 19th century of the late Joseon Period, was influenced by auspicious paintings such as *the paintings of Guo Fenyang's Enjoyments of Life* (「郭汾陽行楽図」), also the Korean written full-length verses such as a couple of versions of *the Verse of Man's Life* (『男

子歌』、『男児歌』) and *the Song of Capital* (『漢陽歌』). Most of images consist of the Paintings of Man's Ideal Life are mainly based on the context of a couple of versions of *the Verse of Man's Life* and those images are described as the most successful man in the society of the period. Those Korean written full-length verses shows the life of middle class, the recognition of the reality and the culture of pleasure life of the middle class, thus the Paintings of Man's Ideal Life, *Pyongsaeing-do*, is also possibly connected to the culture of the middle class.

The aspiration toward the high official posts of bureaucracy which is the main theme of the Paintings of Man's Ideal Life can interpreted as the desire of the middle class' who was successful in accumulating a great wealth and appeared as the new economic power, also enjoyed the material fertility and had around sophisticated culture living in the capital but was under discrimination in promoting to the high official posts of bureaucracy in the late Joseon Period. The Paintings of Man's Ideal Life visualized the ideal life that the middle class was longing and was patronized by the wealthy middle class. It must be certain that the Paintings of Man's Ideal Life was appreciated as the symbol of fortune and happiness by the wealthy middle class rather depicting the real life of aristocratic class, *yangban*.

はじめに

朝鮮時代における風俗画は 17 世紀後半から本格的に制作される⁽¹⁾。宮廷の行事を詳細に描く儀軌図や両班官僚の文化活動を描く契会図・雅集図などの点景として描かれるのがその始まりであるが、世相そのものを画題として取り上げるようになるのは英祖年間の 18 世紀後半以降のことである⁽²⁾。この時代の風俗画の画題には、従来の画壇では作例の少ない庶民の日常生活を実写したかのような生き生きとした表現が多く見られ、農・工・商の生業が主題として描かれるようになる。本稿で取り上げる「平生図」は、朝鮮時代の後期に風俗画の制作が活発になっていく中で、両班官僚を画題とした「士人風俗画」⁽³⁾として注目されてきた。

「平生図」は士大夫の一生の出来事を描く画題で、その構成は初誕生の祝いから始まり、成長した子供の婚姻儀礼、そして科挙及第とその後、王朝の重要な官職に就く内容を順次描き、最後は大勢の子孫から祝福を受けながら婚礼を再現する回婚礼で締めくくられており、これらの通過儀礼と立身出世の過程を図解したものである。両班官僚を絵画化するものとしては雅集図、契会図などの他には殆ど作例がない。

しかし、「平生図」という画題の来歴は不明で、朝鮮時代の文献記録に未だその名称は見当たらない。朝鮮時代の絵画制作は礼曹に属した図画署の画員が担っていたが、1783 年、正祖が奎章閣に差備待令画員と呼ばれる職制を設け、図画署の絵画制作を吸収することになった。この差備待令画員に関する資料は『内閣日曆』の記録として残っているが、その資料の中にも「平生図」を言及した箇所は存在しない。同様の画題で画面構成が類似する「平生図」が多く現存する中で、制作と享受についてこれほど記録が残存しないことも珍しい。先行研究では、「平生図」は豪華な通過儀礼の描写と両班官僚の段階的出世の表現から、朝鮮後期の京華士族でなければ享受できない世界を表現した士人風俗画⁽⁴⁾として評価されている。

本稿では、「平生図」を新たに読み取り、その制作の背景と享受の有り方について改めて検討した

い。その際に、「平生図」に表現される男性の一代記の描写は当時の歌辞文学をテキストとしていることに注目し、歌辞との相関関係と制作の享受について分析を加えたい。即ち、19世紀に入り、理想的な男性の一生と都市の遊興を詠んだ「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)⁽⁵⁾、「男児歌」などは、「平生図」のテキストともいえる長編歌辞で、「平生図」の殆どの場面がこれらの歌辞に詠まれている点は特に注目に値する。本稿では、「平生図」の主題的モチーフは「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」などの歌辞の絵画化であり、「平生図」の流行がこれらの歌辞文学と文化的基盤を共有していることを指摘するとともに、朝鮮時代の通過儀礼と官職の絵画化とその享受をめぐる社会の価値観の変化を捉える。特に、「平生図」は人物中心の一代的叙述が画面構成の中心である点、そして社会の身分観が大きく変化していく19世紀にその需要と享受が集中している点などに注目し、対応する歌辞文学の丹念な解釈と照らし合わせ、「平生図」が発信する朝鮮時代後期の社会と文化の断面を捉えたい。

I 「平生図」の系譜

(1) 「平生図」の系譜と研究史

「平生図」は、韓国の各博物館や美術館などに所蔵される11点余りの所在が確認できるが、所在が不明確な個人蔵や北朝鮮の博物館に所蔵されている作例を含めると30点余りにのぼる。⁽⁶⁾ 画帖形式のものもあるが、作例の大部分は大画面の屏風絵である(表1)。

表1 「平生図」所蔵目録

	筆者	題名	制作年代	材質	寸法 (cm)	所蔵先	備考
1	伝金弘道	慕堂洪履祥平生図	18世紀末-19世紀初	絹本彩色	122.7×47.9	国立中央博物館	8曲
2	伝金弘道	澹窩洪啓禧平生図	19世紀初-中期	絹本彩色	76.7×37.9	国立中央博物館	6曲
3	伝金弘道	平生図	19世紀初-中期	絹本彩色	153×51	日本幽玄斎	6曲
4	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	135.5×51	世宗大学博物館	12曲
5	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	64.5×33.5	高麗大学博物館	8曲
6	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	91.5×42	ソウル大学博物館	8曲
7	筆者未詳	平生図	19世紀頃	絹本彩色	53.9×35.2	国立中央博物館	8曲
8	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	119×34.6	温陽民俗博物館	12曲
9	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	103.7×37	松巖美術館	8曲
10	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	119×38.5	松巖美術館	10曲
11	筆者未詳	平生図	19世紀頃	紙本彩色	117.2×31	ソウル歴史博物館	10曲

(崔誠希『朝鮮後期平生図研究』、梨花女子大学校大学院、2000年度修士論文を参照し、筆者作成)

「平生図」がいつ頃から制作されたのかについては不明な点が多いが、18世紀後半、経済的發展に伴って屏風絵の制作が盛んになる時期であると推測されている。⁽⁷⁾ 「平生図」は、描かれた内容から大きく二つに分けられる。一つは初誕生、婚姻、回婚などの人生の通過儀礼を描いた部分、そして、もう一つは官僚生活について描いた部分である。特に官職を表す図は屏風の多くの扇に描かれ、8曲の屏風絵の場合は概ね5扇を占める。

落款・印章を有しない作例が大部分であるが、中には、慕堂洪履祥(1549-1615)の一生をモデル

にしたとされる「慕堂洪履祥平生図」(以下、「慕堂平生図」と略称する)と澹窩洪啓禧(1703-1771)の一生を描いた「澹窩洪啓禧平生図」(以下、「澹窩平生図」と略称する)が知られており(図1、図2)、この点が、「平生図」は高級官僚であった人物の功績を称え、重要な官職生活を記録として残すために制作されたとする重要な手がかりとなり、大部分の「平生図」が高官大爵を輩出した家門のために制作されたものと見なされた。⁽⁸⁾



図1 伝金弘道筆「慕堂洪履祥平生図」8曲 国立中央博物館蔵 ソウル

「平生図」の制作について最初に言及した李東洲は、「慕堂平生図」の回婚礼の上段に記されている「辛丑九月士能画于瓦署直中」という落款を根拠に、金弘道(1745-1806?)の初期風俗画と推定した。⁽⁹⁾ 辛丑年は1781年(正祖5)であるが、金弘道が1781年に檀園と号を改める以前、士能と称していた辛丑年、即ち、金弘道が37歳に制作したとみる。各扇には描いた場面を説明する題箋が付されており、その内容は、第1扇初度弧筵、第2扇婚姻式、第3扇応榜式、第4扇翰林兼修撰時、第5扇松都留守到任時、第6扇兵曹判書時、第7扇左議政時、第8扇回婚式となっている。

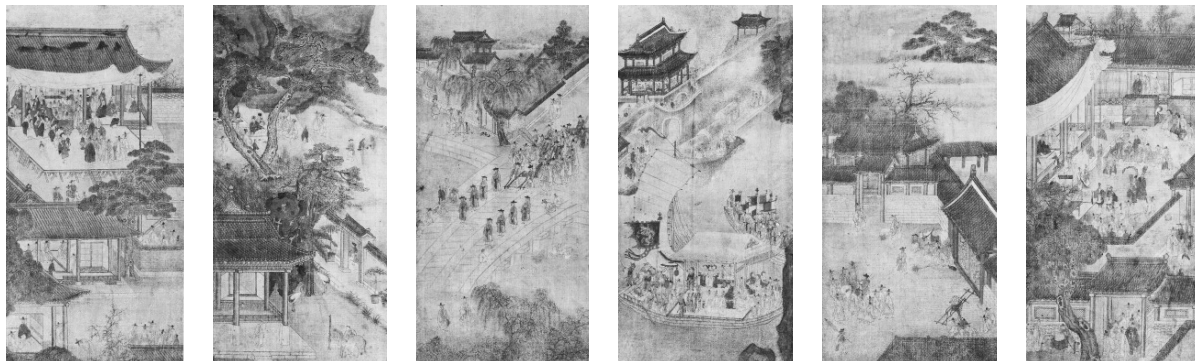


図2 筆者未詳「澹窩洪啓禧平生図」6曲 国立中央博物館蔵 ソウル

また、「澹窩平生図」の第2扇の裏に添付された別紙にも、「平生図捌幅御製賜奉朝賀洪啓禧讀書婚礼科挙平壤観使回甲宴内閣大臣此則我国名画使金弘道号檀園画写」という落款があり、「慕堂平生図」と共に「澹窩平生図」も金弘道作と確信されてきた。⁽¹⁰⁾ そして、この記録から、「澹窩平生図」の制作は、洪啓禧が奉朝賀になった1765年から洪啓禧の没年である1771年まで、即ち、金弘道が21歳から27歳頃に描かれたと推定され、「慕堂平生図」より初期の作と位置付けられた。⁽¹¹⁾ 洪啓禧は1765年、英祖即位40年の慶事に行った景賢堂受爵の行事に奉朝賀として参加したので、英祖が自らの長寿を祝う行事が終わると、老いた臣下洪啓禧に平生図を下賜した可能性が推定された。⁽¹²⁾ しかし、別紙の記録に書かれている内閣大臣は奎章閣の官吏を指す官職名であることから、この記録は奎章閣が設けられた1776年以降のものと考えられ、洪啓禧の一生とは一致しない。⁽¹³⁾

屏絵の内容に関わる記録を有するもう一つの作例は日本の幽玄斎が所蔵する「平生図」である。現

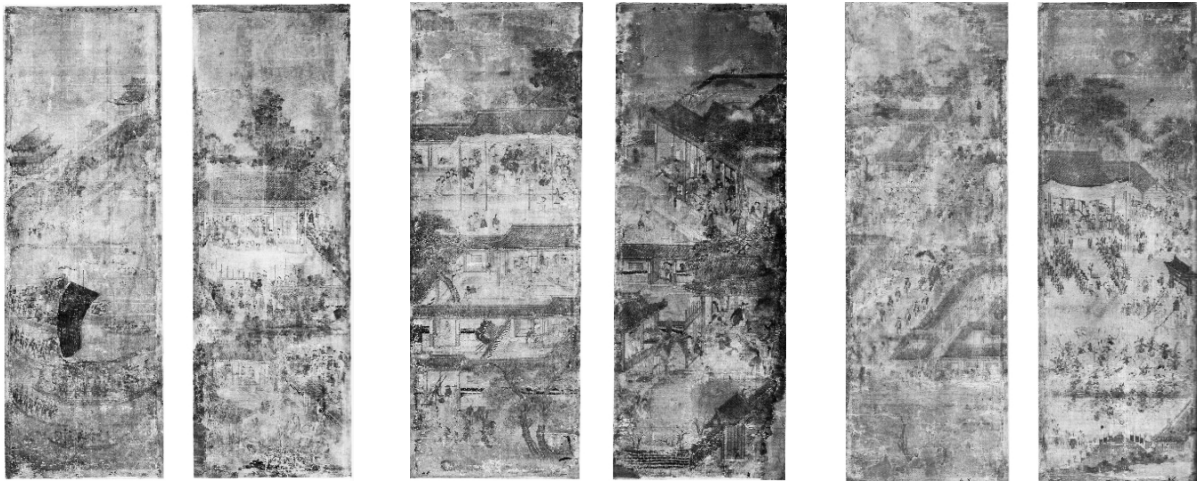


図3 筆者未詳「平生図」6曲 京都幽玄斎蔵 京都

在は6幅のみが現存するが、当初は恐らく8扇で完結する屏風絵だったと考えられる。制作者に関する落款や印章はないが、各扇の上段に屏風絵の内容に関わる記録が確認できる。第1扇と思われる画面には「第一児生周年初度宴図生男入東床礼図」、第2扇には「第二新郎新婦婚姻行礼図」、第3扇が欠損し、第4扇に当たると考えられる画面の上段には「第四平安監司到任渡大同江図」、第5扇には「第五兵曹判書大練探戒默慕華館図」、その他は、「□□領議政退筵過鐘路上図」と「□□□□相夫婦俱□婚□□年行回婚礼」と書かれた2幅である。⁽¹⁴⁾「慕堂平生図」、「澹窩平生図」と共に幽玄斎蔵「平生図」も金弘道作と断定され、落款や記録を有する3点の「平生図」の中で最も早い作例と評価される。⁽¹⁵⁾幽玄斎蔵「平生図」は、上段と下段に構図が大きく分けられ、それぞれの空間に複雑で緻密な筆致で建物や大勢の人物が描きこまれており、1扇に一つの出来事を主題とする「慕堂平生図」や「澹窩平生図」とは構成が異なっている（図3）。陳準絃は屏風絵に落款もしくは記録を有する3点の「平生図」の中で、幽玄斎蔵「平生図」を朝鮮時代後期の風俗画の中で記念碑的な作品として位置付け、様式からみて「澹窩平生図」の原型と解釈した。⁽¹⁶⁾そして屏風絵の規模や緻密な描写からみて宮廷の下賜品であると推定し、3点の「平生図」は、幽玄斎蔵「平生図」から「澹窩平生図」へ、そして「慕堂平生図」へと様式が発展・継承され、後代になると「澹窩平生図」と「慕堂平生図」の複本や民画としても大量に制作されるようになったと推測している。⁽¹⁷⁾即ち、3点の「平生図」は金弘道の20代から37歳までの様式の変化がうかがえる作例であり、いずれも家門の来歴と威信を誇り、記念する目的で制作され、朝鮮時代の士大夫の人生観と出世観が表現されていると主張する。⁽¹⁸⁾

しかし、3点の「平生図」が金弘道による制作であることには検討の余地が残る。前章でも触れたように、英祖が画員である金弘道に命じて「平生図」を制作させたという記録は全く見当たらない。「平生図」という画題そのものも、前述したように奎章閣の差備待令画員の記録である『内閣日歴』に登場しない。一方、崔誠希は、「慕堂平生図」の落款の筆致は金弘道筆とされる他の作品のそれとは画然と異なり、「平生図」に捺されている印章も金弘道の他の作品の中には見つからないことから、「平生図」の金弘道筆の説に疑問を投げかけた。⁽¹⁹⁾そして、金弘道の真作とされる「行旅風俗図屏風」や『風俗画帖』などの構図と人物描写を比較し、「平生図」の様式表現は金弘道のそれとは距離があると指摘した。⁽²⁰⁾さらに、「平生図」に見られる二重輪郭描法と量感を表すための立体表現は19世紀に広く使用される技法であると指摘し、「平生図」の制作を19世紀と推測した。⁽²¹⁾確かに、金弘道が

「慕堂平生図」を辛丑年九月に制作したとする款識には疑問が残る。辛丑年は1781年（正祖5）であり、金弘道はその年の8月26日から9月16日まで正祖の御真影を制作していた。御真影の制作は、宮廷画員にとって最も名誉ある仕事として、同時代の技量の優れた画員がその制作を担ったが、金弘道が国王の肖像画を描き、一か月も経っていない9月に再び8曲の屏風絵の制作に取り掛かったとするのは不可能に等しい。⁽²²⁾「平生図」は実在する人物の一生を図解し、記念する記録画とする説と金弘道によって制作され始めたという主張は屏風の記録を安易に信じ、また厳密な図の読解を経ないまま、通説として受け入れられてきた。「澹窩平生図」の第2扇の裏に添付された別紙に、「回甲宴」と記されているが、これも回婚礼の間違いであり、別紙の記録が屏風絵制作と一致していないという傍証になる。

(2) 「慕堂平生図」と「澹窩平生図」

そもそも、「平生図」が実在した人物の功績を称えるために描いた記録であるという主張は「澹窩平生図」と「慕堂平生図」からであった。確かに、澹窩洪啓禧と慕堂洪履祥との関連性は屏風絵の落款を根拠としたものであるものの、歴史的事実と照らし合わせてみると、必ずしも符合しているとはいえない。⁽²³⁾以下、慕堂洪履祥の豊山洪氏家門と澹窩洪啓禧の南陽洪氏家門については、すでに先行する詳細な家門研究があるので、それを参照しながら、19世紀における両家門についていくつかの事実を確認しておこう。⁽²⁴⁾

洪履祥の豊山洪氏家門は、洪履祥の代が最も栄華を極めた時期であった。洪履祥は始祖の9代孫で、息子6人の中、4人が文科に及第し、6人全員が官職に就いた。⁽²⁵⁾「慕堂平生図」の各扇の題箋には、初度弧宴・婚姻式・応榜式・翰林兼修撰時・松都留守到任・兵曹判書時・左議政時・回婚礼と書かれているが、洪履祥（1549-1615）は、1573年、司馬試に、1579年、文科甲科で及第したのち、開城留守、慶尚道と京畿道の觀察使を歴任しているので、兵曹判書、左議政は洪履祥が就いた官職とは符合しない。洪履祥の豊山洪氏家門はいわゆる外戚名門で、洪履祥の6代孫の中には思悼世子妃惠慶宮洪氏を初め、洪鳳漢、洪象漢、洪榮性のような英祖・正祖代の官僚、そして、洪良浩、洪敬謨、洪奭周などの学者を輩出した名門である。⁽²⁶⁾ところで、「平生図」の様式が示す19世紀の洪履祥の家門は、惠慶宮洪氏の父である洪鳳漢の代以降、没落の道をたどる。特に1762年に起きた壬午禍変（思悼世子の死）に洪鳳漢が関わっていたことは、豊山洪氏家門にとって致命傷となった。⁽²⁷⁾また、洪麟漢が世孫（後の正祖）の即位を妨げたことも長らく政治的批判にさらされていた。⁽²⁸⁾しかしながらも正祖在位期間は豊山洪氏家門も庇護を受け、家門復興の兆しが見えてきたが、1800年、正祖の突然の死により豊山家の再建は難航し、豊山洪氏家門は再び混乱と分裂の中に陥ることになる。⁽²⁹⁾その没落がさらに決定的になったのは、純祖即位後に貞純王后が統治していた時期であった。1801年に起きた辛酉邪獄で連累した惠慶宮洪氏の弟である洪榮任は、『明義録』の罪案に登載された罪人として処刑され、家門は没落していった。⁽³⁰⁾1805年（純祖5）貞純王后の死後、惠慶宮洪氏が『閑中録』を執筆し、家門の無辜を綴り、父洪鳳漢に加えられた疑惑を取り除こうとした。⁽³¹⁾洪鳳漢の子の洪榮倫が1809年上疏し、父洪鳳漢の無実を訴えたが、家門の再建を推進する力はすでに尽きていた。⁽³²⁾⁽³³⁾

澹窩洪啓禧も思悼世子の死と関連していた人物である。英祖の信任を得ていた洪啓禧は宰相の座までは届かなかったが、1737年に壯元及第し、その後正言、校理、修撰を経て、刑曹判書、吏曹判

書、兵曹判書、戸曹判書及び芸文館大提学等を歴任した。1762年、京畿道觀察使となり、奉朝賀になったが、「澹窩平生図」の2扇の裏に付されている別紙の記録でいう「平壤觀使」には就いていない。

興味深い事は、「澹窩平生図」が描かれたと推測される19世紀に、門閥家である南陽洪氏家門も滅族の危機にさらされていた。当時、思悼世子が惨禍された壬午禍変（1762）を主導した洪啓禧は門閥家の頂点に立っていたが、正祖の即位の過程で洪啓禧の息子と孫が首謀した正祖暗殺未遂事件が発覚し、事態は急変した。即ち、洪啓禧の子の洪趾海は正祖の即位に反対し、その後洪趾海の子の相簡が叔父の述海、纘海と共に正祖暗殺未遂事件に中心的な背後勢力として関わったことで、徹底した滅族の惨禍に見舞われることになる。⁽³⁴⁾大逆罪で処刑される際、洪趾海が殺されたのみならず、すでに世を去っていた洪啓禧も官爵を追奪された。⁽³⁵⁾生き残った洪啓禧の子孫は正祖・純祖・憲宗の三代の間、主に地方に隠居し、祖先の伸冤のために尽力した。⁽³⁶⁾滅門した家門のために、伸冤と復権を奏請したのは洪啓禧の玄孫であり、洪趾海の曾孫である洪在光（1816-1885）である。⁽³⁷⁾洪啓禧は1864年（高宗1）に官爵が回復され、洪趾海、洪纘海、洪相簡は1874年（高宗11）に伸冤される。⁽³⁸⁾洪述海の伸冤は以後1908年になってやっと実現されており、⁽³⁹⁾澹窩洪啓禧の「平生図」が制作されたと推察できる19世紀に、洪啓禧の直系子孫は逆賊家門として両班の身分すら維持することができなかった。

このような事情を考えると、家門の栄華を称え、洪履祥と洪啓禧の一生の功績を図像で記録しようとして「平生図」が制作されたと見なすことは些か無理がある。そして、「平生図」は高官への立身出世を念願する加官福祿的な文様や士大夫の文化を象徴するモチーフが数多く描きこまれていることから、京華士族が自身の富と官職の永続を念願して制作したとみる説もあるが、⁽⁴⁰⁾それも19世紀における豊山洪氏と南陽洪氏の境遇に照らしてみると、「慕堂平生図」及び「澹窩平生図」の制作基盤と享受層を京華士族に求めるには違和感がある。

このように、「平生図」が19世紀の豊山洪氏家門や南陽洪氏家門の威信を称えるために制作されたとは考えにくいということ、そして、当時の京華世族を基盤として生み出された文化でないと推定されるならば、人の一生の重要な出来事を絵画化するという「平生図」の特異な画題は、いったいどこにその成立の根源を求めることができるのだろうか。次章では、「平生図」の主題的モチーフを改めて綿密に分析し、一代記の絵画化における成立の歴史的条件と享受層の文化的基盤について考察する。

II 一代記としての「平生図」

(1) 一代記の絵画化と「郭汾陽行楽図」の流行

すでに前章で触れたように、現存する「平生図」の中に、幽玄斎蔵「平生図」を初め、「澹窩平生図」と「慕堂平生図」には、図の中に、各扇の主題が直接書かれているか、もしくは添付された題箋に図の内容が記されている。この3点の「平生図」は後代の「平生図」の構成にも影響を与え、そのヴァリエーションが多く制作された。各扇の画題をまとめると、儀礼に関する内容としては、初誕生、婚姻礼、回婚礼、回甲礼、回榜礼が描かれ、勉学と官職生活に関しては、書堂での勉学、小科応試、応榜式、最初の官職、地方官赴任、判書行次、政丞行次、そして致仕となっている（表2参照）。

人の一代記を主題とした絵画作品は、「八相図」や「孔子聖蹟図」などの宗教絵画の他に、世俗人

表2 「平生図」の場面選択（作例の番号は表1の作品番号を表す）

場面		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
儀 礼	初誕生	○		○	○	○	○	○	○	○	○
	婚姻礼	○		○	○	○	○	○	○	○	○
	回婚礼	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	回甲礼				○						
	回榜礼				○						○
官 職	修学				○				○		
	小科応試				○				○		○
	応榜式	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	最初の官職	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	地方官赴任	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	判書時	○		○	○	○	○	○	○		○
	政丞時	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	致仕		○						○	○	
	帰郷行次								○		

の一生を主題としたものとして唐の郭子儀の一生を絵画化した一連の作例をあげることができる。唐代の救国の英雄であった郭子儀、即ち、郭汾陽は、中国では、官福と財福、子孫福まで享受した幸福な人生を送った人物として民間で説話化され、吉祥や祈福信仰の対象となった。民間では、郭子儀の歴史的な英雄としての行跡より、富貴功名と寿福康寧、そして子孫繁栄の祈福的象徴性が強調され、「郭子儀祝寿図」、「郭子儀故事図」、「郭子儀拜仙図」などの画題⁽⁴¹⁾として発展し、流行した。郭子儀の幸福に満ちた人生は朝鮮時代に主に吉祥を象徴する絵画として享受された。郭子儀を描いた画題の中でも特に朝鮮に影響を与えたのは、多男のイコンと

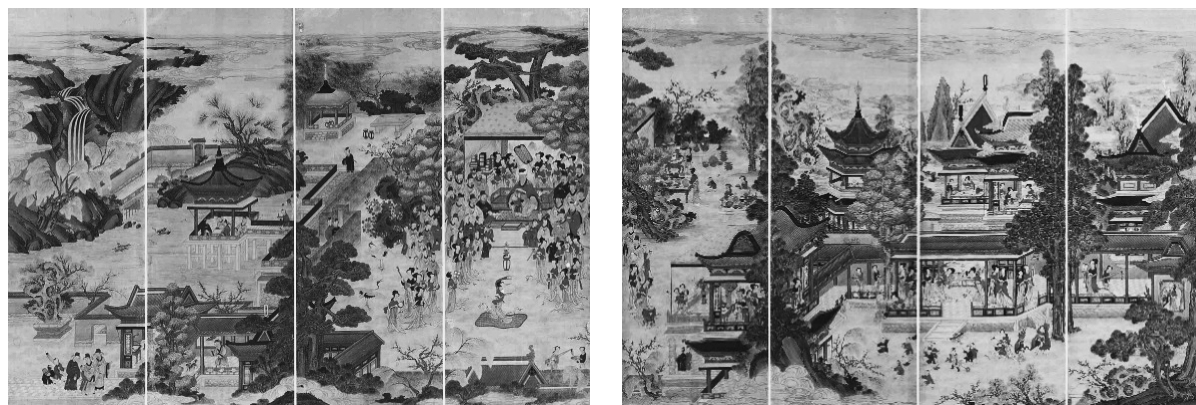


図4 伝金得臣筆「郭汾陽行楽図屏」8曲 18-19世紀 国立中央博物館蔵 ソウル

して描かれた「郭汾陽行楽図」であり、朝鮮時代の後期に広く流行した。郭子儀の80歳の誕生を祝う祝宴会を描いた「郭汾陽行楽図」は、『新唐書』に「八人の息子と七人の婿が皆朝廷で貴顕した。孫たちが数十人もいてみんなの顔が分からないので、安否を尋ねられるとただうなずくのみである」と描写される郭子儀の一生と関わりがある。朝鮮時代に制作された「郭汾陽行楽図」は邸宅内で広げられる郭子儀の長寿祝いの様子を描き、多くの子孫に恵まれた郭子儀の人生を強調するものが多い(図4)。朝鮮時代に「郭汾陽行楽図」の画題が初めて登場したのは、肅宗年間であることが知られている。即ち、『列聖御題』に収録されている肅宗の題詩「題郭汾陽行楽図」と「題郭子儀行楽図賜王子」は大勢の子と婿、そして孫に囲まれ、福祿を享受する郭子儀の様子を詠んでいる。特に「題郭子儀行楽図賜王子」では、古来より万福を備えている者は郭子儀が第一であるとし、近くに置いてみながら、万福と長寿を享受することを祈願している。「郭汾陽行楽図」の制作は、19世紀の王室の嘉礼都監儀軌にも明記され、王室では子孫の繁盛を祈願するイコンとして嘉礼に珍重されていた。⁽⁴⁴⁾

ところが、「郭汾陽行楽図」は王室のみならず、民間でも流行していた。1844年にハンサン居士(한산거사)によって著されたハングル歌辞である『漢陽歌』の中にも「郭汾陽行楽図」が登場す

る。「漢陽歌」の内容は漢陽で行われた様々な遊びを羅列しているが、市場を描写する中で、様々な種類の絵を販売する絵屋についての興味深い記述がある。広通橋近くにある絵屋には、商山四皓図、陶淵明など賢聖を描いた漢画を初め、瀟湘八景図などの山水画、十長生図、百子図など、実に多様な絵が販売されていたが、その中には「郭汾陽行楽図」が含まれているのである。⁽⁴⁵⁾

(上略)

광통교 아리가지 각식그림 걸너구나 (広通橋の下の店には各種の絵が掛かっている)

보기조흔 병풍초의 박주도 요지연과 (見事な屏風次、百子図と瑤池宴図)

곽분양 횡락도며 강남금릉 경직도며 (郭汾陽行楽図に江南金陵耕織図)

한가흔 쇼상팔경 산슈도 괴이하다 (閑暇な瀟湘八景、山水も奇異である)

(下略)

この『漢陽歌』は、郭汾陽の功績と福祿に満ちた人生の中でも、郭汾陽の人生の幸福を描いた「郭汾陽行楽図」が民間に流通していたことを示す内容で、注目すべきである。盛大な80歳の誕生宴を画題とした「郭汾陽行楽図」は、民間に広く受け入れられ、「平生図」の回婚礼や回甲宴の絵画化に影響を与えていたと思われる。大勢の子孫に恵まれることを重視した朝鮮の社会で「郭汾陽行楽図」は浸透しやすい主題であり、「平生図」のような、誰もが念願する理想的な人生を絵画化する背景には、「郭汾陽行楽図」にみる華やかな人生の視覚化との接触があったと考えられる。

ただし、朝鮮時代に制作された「郭汾陽行楽図」の屏風絵は、「平生図」のように、1扇に一つの主題を描き、各扇に画題を示す題箋を貼り付ける標題式ではなく、郭子儀の誕生宴を単一主題として大きく取り上げている点で異なる。人生の節目になる儀礼と出世を成し遂げた官職生活を合わせて一代記を構成する「平生図」とは、画面構成上の直接的な繋がりは見いだせない。しかし、朝鮮時代の後期に、富裕層を中心に回婚礼や回甲宴がますます豪華に行われるようになり、長寿の祈福として描かれた「郭汾陽行楽図」は、「平生図」の回婚礼や回甲宴の主題に結合していったと思われる。

朝鮮時代の後期にハングルで書かれ、広く流行した歌辞『回婚慶祝歌』、『回婚参慶歌』などは、朝鮮時代の後期に回婚礼が如何に盛大に行われたのかを物語る。『回婚慶祝歌』では、父母の回婚に、100人余りの子孫が集まり、高台広室に大きな祝いの机を置き、その上に様々な山海の珍味をそろえ、「汾陽王に負けない」豪華で盛大な回婚を祝ったと詠んでいる。⁽⁴⁶⁾このような歌辞の流行は、儒教の孝の思想が具現された回婚という礼俗に、郭子儀に着せられる長寿の祈福が親密に結びついていることを物語る。

(2) 官職生活の絵画化

一方、「平生図」の主人公の男性が科挙に及第したのち、品階の高い官職に就いていく内容は、8曲の屏風の場合、5扇を占めるほど、その表現の比重が高い。朝鮮時代の絵画の中で、官僚の姿を描く作例としては、官僚と文人社会を中心に流行した契会図や耆老宴図などをあげることができるが、図の中に官職を示す象徴的なモチーフをあしらい、官僚の品階を具体的に示した絵画は見当たらない。正祖が1783年に昌徳宮の奎章閣に設けた差備待令画院では画員の試験として祿取才を実施した

が、祿取才の画題に六曹の各司が画題として登場するのは1808年（純祖8）である。純祖代（1800-1834）の画門別画題総覧の俗画の画題に、工曹宮作、兵曹戎点、戸曹点検、刑曹推閱、吏曹参謁、礼曹試士と、六曹の諸任について差備待令の画員に絵を制作させたとするが、その作例が残っていないため、官衙の風景を中心に捉えたものなのか、それとも屋内での執務の様子を描いたのか、具体的な内容は不明である。

官職生活を画題とし、屏風に仕立てられ鑑賞された絵画が存在した可能性がうかがえる題材詩としては、李采（1745-1820）の「題徐聖可（簡修）画屏後」が知られている。画題が官職生活であるだけに、先行研究では、「平生図」の官職生活の重要な構成になったとし、このような伝統の上に通過儀礼の場面が結合され、「平生図」が成立したとみている。⁽⁴⁸⁾

ここで、李采の「題徐聖可（簡修）画屏後」の内容を改めて検討してみることにはしたい。『華泉集』巻九に所載の「題徐聖可（簡修）画屏後」は、李采が徐聖可の所蔵する八曲屏風を鑑賞し、詠んだ漢詩である。第1扇では書堂で学ぶ姿を詠み、第2扇では成均館での勉学に励む様子を、そして第3扇は科挙に壮元及第する喜びを詠み、第4扇では初めての官職生活を、第5扇では宰相のお出ましの姿を表し、第6扇は官吏の赴任の様子を、そして第7扇と第8扇は致仕の状況を詠んでいる。⁽⁴⁹⁾

しかし、官職生活においては、全体的な脈絡とその深意を探ってみると、単に屏風を称賛、もしくは鑑賞しているものではないことが分かる。むしろ、出世志向の風潮に警鐘を鳴らし、批判しているのである。例えば、第3扇の内容をみると、「三場の試験を壮元で通ったことを称え、故に王文正も羨まない」としながら、「宴会の喜びは聞こえるが、司馬公の施した善政は聞こえてない」とし、「世の生きる路は難しく、人心は容易く変わるので、喜びより憂慮の深さを知らねばならない」と戒めている。また、第5扇では、進むことを恐れ、退くことを争う宰相を詰難している。

書堂での勉強から扇ごとに官職が高くなっていく様子がうかがえる点は「平生図」と近似し、実際に、官職生活を描いた屏風絵が存在した可能性は高く、李采が題跋したように、両班士大夫が鑑賞する場面があったことも想像できる。しかし、李采の「題徐聖可（簡修）画屏後」は、官職について題詩をしているものの、詩の内容は平生図の構成と直接関わっているように見受けられない。しかも儒学者である李采はその屏風絵を称賛していない。科挙に及第し、順次出世していくことを決して喜ばしく栄誉ある人生であるとはせず、敢えて戒めている。端麗な風流や気品ある品格を誇りとする両班士大夫が、「題徐聖可（簡修）画屏後」にみるような現実主義や出世主義を露わに表現した屏風絵を日常生活の空間を飾るものとして享受していたとすることには疑問が残る。

例えば、朴齊家（1750-1805）は、正祖の命を受け、奎章閣の臣下と共に城市全図を見て百韻詩を詠んだが、その中で、「貧しい人は錢を求め、浅薄な人は官位を求める」といい、露骨に官職を求めることを蔑んでいる。また、李采のこの題画詩は、題目に「平生図」屏風を直接言及しておらず、題材詩の深意からも、官職を主題とした絵画は決して両班の文化に根差して広く流行したものではなかったと思われる。

以下では、「平生図」の成立に直接影響を与えたと思われる歌辞作品、特に「男子歌」と「남자가」（「男子歌」）、「男兒歌」を取り上げ、「平生図」との関連を検討したい。

Ⅲ 「平生図」のテキストとしての「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」

(1) 「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」と「平生図」の相関関係

「平生図」は朝鮮時代の後期に入り、長寿を祝う宴会がますます豪華になり、また、婚礼六十周年を祝う回婚と科挙に及第してから六十周年を記念する回榜など、六十甲を祝う儀式が流行していく過程で成立⁽⁵¹⁾されていた。

ところで、人の一代を題材とする作品は特に19世紀の歌辞文学に多く見られる。例えば、「男子歌」や「男子歌」の異本とされる「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」、また「玉屑華談」がそれである。「玉屑華談」は、崑崙山から地勢の気運を受け継いだ朝鮮の漢陽の一家に奇男子が生まれ、生得の才能で科挙に及第し、立身出世する理想の人生を歌っており、「平生図」の構成に近似している。ただ、「玉屑華談」の場合は、歌辞のかんりの分量を中国の風水と歴代王朝を称えることに割き、また崑崙山の一つの支脈から朝鮮が生成されるとし、八道の名山と江を列挙しながら朝鮮の地勢と朝鮮の建国を頌祝する内容を中心としている。奇男子に関する記述は、歌辞の後半部分に歌われているが、その内容は天性の才能を持つ奇男子は春塘台謁聖試に及第し、数々の官職を歴任していく様子を描く。特に、御賜花を飾り、青衫を身にまとった主人公が青驃馬にまたがり、街を練り歩くと詠む箇所は、「平生図」の三日遊街を連想させ、官職を昇進していく段階も、初任の翰林注書から再任に僉使、そして弘文館校理、修撰、正言を経て、左承旨、右承旨、副承旨、都承旨の内職に就いた後、江原監司、慶尚監司として地方に赴任し、また大司成、大提学、左賛成、右賛成、右議政、左議政まで歴任⁽⁵²⁾して、府院君に封じられたと、具体的に官職名が取り上げられている。しかしながら、「玉屑華談」は、前述した李采の「題徐聖可(簡修)画屏後」と同様に、通過儀礼に関わる内容が全く言及されないまま、官職生活のみが歌われている。そして、歌辞の後半部では、人生の最後は誰でも北邙山に帰ることに触れ、人間が死に至ると現世の富貴栄華はすべて虚事であるという、人生の虚しさを強調⁽⁵³⁾し、やや暗鬱に歌を終結している点は、人生の行楽を明るく志向する「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」とは異なる趣向である。

ところで、出生から始まり、成長していく過程の通過儀礼と修学、科挙及第を経て、官職を歴任していく人間の一代を時間軸に沿って表す「平生図」の構成は、19世紀のハングル歌辞である「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」の叙述の順序と内容がほぼ一致している点で格別に注目すべきである。奇男子の出生と福祿に満ちた幸運児の一生が叙述されている点では、「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」は「玉屑華談」の影響を受けた可能性があり、したがってこれらの歌辞作品は同じ文化的基盤を共有しているとも指摘⁽⁵⁴⁾されるが、「平生図」の主題における通過儀礼が占める比重を勘案すると、後述するように、「平生図」における一代記の表現は、「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」にそのテキストを求めることができると考える。以下では「平生図」の主題的モチーフと「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、と「男児歌」を照合して、「平生図」の成立の背景を具体的に検討したい。

現在、知られている「男子歌」の異本は具寿榮が初めて紹介した「男子歌」(以下、具寿榮紹介本と略称する)、韓国中央研究院蔵書閣が所蔵する「남자가」(「男子歌」、以下、蔵書閣本と略称する)、そして国立中央図書館に所蔵されている「男児歌」(以下、中央図書館本と略称する)の三種で

ある。具寿栄紹介本「男子歌」は具寿栄が「男子歌攷」（『忠南大学校人文大学論文集』8巻2号、1981年）に全文を紹介したが、「男子歌」の書誌情報を明らかにしていないので、出典は不明である。

蔵書閣本は『남자가』（『男子歌』）と題される筆写本に収録される「남자가」（「男子歌」）である。筆写本には「남자가」（「男子歌」）の他にもハングル歌辞である「만언사」（万言詞）、「츠풍감별곡」（秋風感別曲）、「처사가」（処士歌）⁽⁵⁵⁾と一緒に収録されている。歌辞の内容は具寿栄紹介本「男子歌」と類似する箇所が多いが、歌の順序が錯綜していることから、伝写の過程で組みなおされ、また、新たな内容が若干加えられたと考えられる。表紙の見返しには「덩해원월십오일」と記され、その次の頁の左下に「이작은남자의호변호만호소리라」（この作は男子の一度はやるべき唱）という筆写記が書かれている。

中央図書館本は、筆写本『古歌謠記抄』に収録されているハングル歌辞であるが、前述の2種と題目が異なり、「男児歌」と題されている。全体の内容の展開に大きな違いはないが、中央図書館本の分量が最も多い。特に、中央図書館本は、筆写した年代を推察できる点で貴重である。末尾に「뎡득 팔월필서 팔십용은게로기리로라」と簡略な筆写記が付されており、韓国の国文学の研究では「男児歌」と合本される「신종황제구첩문답」（神宗皇帝口捷問答）、「옥설가」（玉屑歌）、「목동이둥의문답」（牧童イジュンの問答）、「봉선화가」（鳳仙花歌）にそれぞれ丁丑孟夏書、己卯、丙子仲春、戊寅初秋書、と年代を推測できる筆写記があり、「男児歌」の丁丑を考え合わせ、19世紀の初頭、1816年から1819年頃に筆写されたものと推測されている⁽⁵⁶⁾。三種の異本の中で、具寿栄紹介本は162行と最も短く、蔵書閣本が175行で、中央図書館本が209行と最も長く、イ・サンウォンは、異本が流通し、伝承されていく過程で内容が拡大されていった可能性が高いとし、具寿栄紹介本から蔵書閣本へ、そして中央図書館本へと発展したと推定する⁽⁵⁷⁾。以上のことから、「男子歌」と「남자가」（「男子歌」）、「男児歌」は18世紀末頃から19世紀の初めに制作され、筆写を重ねながら流行していたとみてよからう。

さて、「平生図」における通過儀礼に最初に登場するのは、初誕生である。「慕堂洪履祥平生図」を初め、現存するすべての「平生図」に初誕生の場面が描かれる。瓦ぶきの邸宅の板の間で、初誕生の膳を前にした子供を、父母、祖父、乳母、客などの人物が取り囲む様子を描く。子供はグレと呼ばれる帽子をかぶり、五色のチョゴリに快子と呼ばれる袖なしの上着を着用している。初誕生の膳には硯

や墨、青色と赤色の糸、米が入った器、弓などが描かれており、子供がその中から何を掴むかによって将来を占う（図5）。

具寿栄紹介本と蔵書閣本の「男子歌」、中央図書館本の「男児歌」の冒頭は、「장안의 벗님녀 이니말삼드러보소」（漢陽の友よ、わが話を聞け）で始まり、天地神明の福祿を授かった秀麗な容貌の奇男子の出生を語る。高貴な品格と福に満ちた主人公の人相は汾陽の福祿を羨むべきではものないとし、主人公の非凡な人生を暗示する。そして初誕生を迎えて着飾った主人公の姿を次のように詠む⁽⁵⁸⁾。



図5 「初誕生」『慕堂平生図』部分

(上略)

비단글레 당머리요 슈부다남 박아시며 (絹グレ唐頭に、寿富多男刺し入れ)

호감토 은장관의 식동옷 학창의와 (胡帽子銀装冠に五色鶴褄衣)

도홍색 식당혀로 유모보모 정흔후에 (桃紅色の帯と色唐鞋で飾り)

(下略)

やがて十歳が過ぎてすでに立派な大人の「熟成人士」になった奇男子は、風采は唐の杜牧之のよう
で、書く文章は李謫仙のように成長し、媒酌人に仲立ちされ、名門の尊堂が喜ぶ中、美しい淑女と婚
礼を挙げる。

(上略)

십세가 넘어지니 숙성닌스 다되였다 (十歳過ぎて熟成人士になり)

풍치논 두목지요 문장은 니적선이 (風采は杜牧之、文章は李謫仙)

(中略)

조홀시고 은안준마 호스로다 셔디품복 (良きかな銀鞍駿馬、豪奢よ犀帶品服)

어엿부다 이실낭아 준수하다 저시셔방 (美しいこの新郎、俊秀なあの新郎)

시비쥬중 디도상의 소년남아 호기로다 (侍陪驕從大道上の、少年男兒は豪気であり)

전안교비 합환주와 동방화촉 올금향의 (奠雁交拜の合歡酒と洞房華燭の鬱金香に)

뇨조숙녀 마자스니 군자호구 아니런가 (窈窕淑女を迎えたので君子の好逮ならんや)

(下略)

「慕堂平生図」と「澹窩平生図」の結婚式の場面は、婚姻儀礼のうち、親迎（嫁迎え）を描いたも
ので、婚礼の当日、新郎が新婦を迎えるために、新婦の家に向かう行列を描く。図の中の新郎は団領
に角帶（犀帶）を締め、紗帽をかぶり、笏を手を持つ。親迎の行列は、4本の青紗燈籠とその後ろに
雁を持つ雁父、新郎の白馬を引く馬丁、そして同行者といった構成になっているが、豪奢な犀帶品服
を着用し銀鞍の駿馬に乗った奇男子が侍陪を伴い大道を練り歩く様子は豪放な気性を表している、と
いう「男子歌」異本三種の叙述と相通じる（図6）。幽玄斎蔵「平生図」は、親迎ではなく、奠雁交
拜の場面を選択しているが、この場面も「男子歌」に依拠している。図には、邸宅の板の間（大庁）
で、大礼床の前に新郎と新婦が立ち、礼を交わす様子が描かれるが（図7）、「男子歌」の異本三種
は、親迎の叙述に続き、奠雁の交拜の礼に触れ、合歡酒を交わし、華燭から鬱金香が漂う中で、美し
い淑女を迎えたので君子の好い配偶であると、奇男子が華やかな婚姻礼を挙げることを歌っている。

「慕堂平生図」に描かれる科挙及第の場面は、三日遊街である。三日遊街は、科挙に及第すると放
榜の儀式が開かれ、文武官には合格の印として国王から紅牌と御賜花を賜り、細楽手と広大や才人と
呼ばれる芸人を帯同し、芸や音楽を披露しながら3日間、漢陽の街を練り歩く行事をいうが、科挙及
第の象徴としてたびたび絵画の題材となった。「慕堂平生図」の三日遊街にも、科挙に及第した男が
団領を着用し、頭巾（幘頭）に御賜花を飾り、手に笏を持って白馬に乗り、紅牌を手を抱える3人の
引路と細楽手に先導されながら街を練り歩く様子が描かれている。「男子歌」には科挙及第の様子が



図6 「婚姻礼」『慕堂平生図』部分



図7 「婚姻礼」『平生図』幽玄斎蔵 部分

次のように詠まれている。

(上略)

춘당대의 알선일다 서울기별 빗비와서	(春塘台の謁聖があると漢陽から急ぎの便りが届き)
슈삼비를 거울너서 오육인 급히오니	(数三盃を傾けているところに、五六人が急いでまいり)
선혜청 분아필과 호조하인 정초지며	(宣惠庁の分兄筆と戸曹下人の正草紙に)
글시용호 샴슈로다	(達筆な写手である)
평성지쵸 다희여서 시관편츠 마흔후의	(一生の才能を尽くして、試官編次の後に)
수시훈니 정권하니 정원스령 방부르니	(守視するところに呈卷し、政院使令が榜を呼ぶ)
장원급제 니로소니 스화청삼 상아홀의	(壮元及第は私で、賜花青衫に象牙笏)
탐화낭은 동접일다	(探花郎は同接である)
무동어학 도라오니 북궐허신 은영이오	(舞童御樂が帰り、北闕した恩榮である)
삼공육경 모히여서 고당열친 효도로다	(三公六卿が集まり、高堂悦親の孝行である)

(下略)

漢江で悠々と舟遊びを楽しんでいた奇男子に、春塘台で謁聖試があるという便りが届き、急いで科挙を受ける。宣惠庁から配られた分兄筆と戸曹の下人から受け取った正草紙に、一生の才能を注いで答案を作成し、呈卷する。やがて栄光の壮元及第をした主人公は御賜花と青衫、象牙の笏を賜る、と詠んでいる部分である。そして、三公六卿が集まる宮廷で国王の恩榮に感謝し、それが高堂悦親の孝行であると歌辞は詠んでいる。「慕堂平生図」と「澹窩平生図」は、「男子歌」から御賜花と青衫、そして象牙の笏の姿に象徴される三日遊街の場面を借用し、大勢の人々が見物する中で街の一角を進んでいく華麗な行列を絵画化している(図8)。「澹窩平生図」の場合は、三日遊街の後に行われる聞喜宴を描いていると思われる。聞喜宴とは親と家門に及第を告げる儀式である。「澹窩平生図」には、

板の間に坐する父に対し、青衫を着て御賜花を頭上から垂らした男は介添えに手伝われ、体を折りかがめながら礼をするしぐさで描かれる。また、広々とした中庭には、遊街の行列に同行した紅牌を持った3人の引路や細楽手、廣大と才人、一家一門が集まっており、「高堂（父母）を喜ばせる孝行をした」という「男子歌」を描いているといえよう（図9）。



図8 「三日遊街」『慕堂平生図』部分

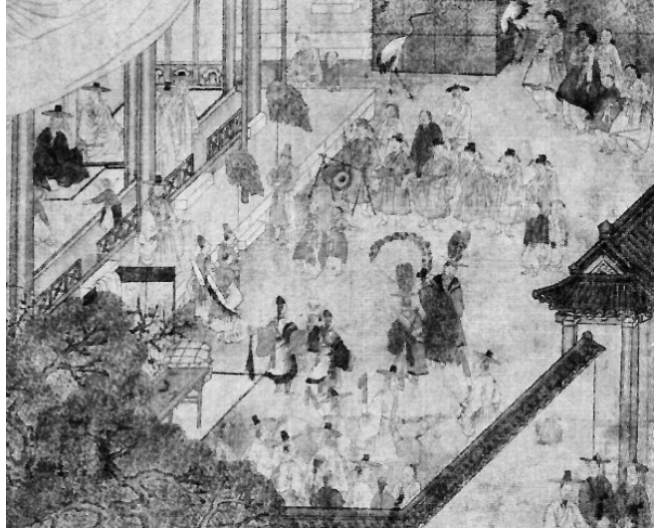


図9 「聞喜宴」『澹窩平生図』部分

「男子歌」の奇男子は、優れた文才を備え持ち、謁聖試に及第した後一気に出世街道を進んでいき、華やかな官職生活を送るが、その様子を「男子歌」は次のように詠む。

（上略）

스변주서 지닌후의 금포은디 추창하여	（事変注書の職を経て、錦袍銀帶で趨踰する）
한님쇼시 켜히여서 오운어좌 되셔시니	（翰林召試を通り、五雲御座に仕える）
진퇴주션 단아하고 규장각 디교금열	（進退周旋は端雅で、奎章閣の待教と検閲の職に就き）
승전거조 민첩하다 스헌부 덩언지평	（承伝举措は敏捷であり、司憲府の正言と持平の職に上り）
지별인귀 가지시니 교리슈찬 흥온후의	（地閥人器を持ち合わせ、校理、修撰を経て）
작차계궤 승풍이라	（爵次階軌は乗風である）

（中略）

일쥬년이 못하야서 동무승지 당상하여	（一周年も経たないうちに同副承旨に堂上し）
옥당금마 부르시니 니조참판 가션하니	（玉堂金馬を呼ばれ、吏曹参判に嘉善して）
관찰스의 순찰스며 초헌박회 구을이고	（觀察使、巡察使となり、輶軒の車輪回して）
우유스며 안무스라 빵가마도 타게고나	（留守事、安撫使となり、双轎も乗れる）
홍예문의 대제학과 경연참찬 트온후의	（弘芸文の大提学と經筵参贊をってから）
병이조의 판서로다	（兵吏曹の判書である）

（下略）

事変注書から始まった主人公の官職は、様々な要職を歴任していく。翰林召試を通り、奎章閣の待教と検閲へと進み、正言と司憲府持平を経て、校理と修撰に上がっていく。威信の高い門閥と度量を

備えた主人公なので、敏捷に昇進すると、一年も経たないうちに同副承旨に堂上し、また吏曹参判を歴任する。さらに觀察使、巡察使に留守と安撫使になり、輶軒（車付き輿）や双轎のような乗り物にも乗れる立場になったと、歌辞は歌っている。さらに、弘文館と芸文館の大提学と経筵参贊をした後に兵曹と吏曹の判書になっていき、やがて一品の官職へと上がっていく。実に様々な官職を列挙し、順調に出世していく有様を誇張している。そして耆老所に入り、奉朝賀として致仕を迎える理想的な士大夫の生涯を送ると叙述する。

「慕堂平生図」は、前述した応傍式の三日遊街を除くと、官職生活を4扇にわたって描いている。屏風の各扇に付されている題箋の記述にしたがって官職名を示すと、翰林兼修撰、松都留守、兵曹判書、左議政となっている。「澹窩平生図」の場合は、翰林兼修撰、兵曹判書、左議政は同じであるが、松都留守の代わりに平壤監司になっており、幽玄斎蔵「平生図」も平壤監司、兵曹判書、領議政を描く。翰林兼修撰の図は、退庁する翰林兼修撰の行列を描いている。翰林は芸文館の奉教、待教、検閲などを指す。官服姿の主人公は随行人を伴い、白馬に乗り、道を進む。鞍籠を手に抱える者が道の先払いをしており、行列を先導している（図10）。輿は、特別な場合を除いて、文臣の堂上官のみその使用が許され、堂下官や武官、蔭官は輿に乗ることができず、馬に乗らなければならなかった⁽⁶⁰⁾ので、馬に乗る姿は翰林兼修撰の位を表す象徴的な手段となっている。



図10 「翰林兼修撰時」『平生図』部分



図11 「松都留守到任式」『慕堂平生図』部分

「慕堂平生図」の松都留守到任の図は、地方官の赴任に伴う一行が峠道を越えていく華麗な行列を描く。馬に乗った武官が先導する行列の後には軍卒と楽隊（大吹打）、そして留守の乗った輿が続く（図11）。輿は、輿の側面を横切る長い2本の轆を、輿の前後にある2頭の馬の鞍に掛けるもので、双轎と呼ばれた。双轎を利用できる対象は、国王と王族以外では二品以上の官僚と承旨を歴任した者に限られていたが、地方官では觀察使、府尹、留守などが利用できた。『平生図』における松都留守到任の図を、双轎に乗る官僚の行列で描くことは、図の主題を乗り物という象徴的なモチーフを通して表そうとしたものであり、兵曹判書や左議政の図においても共通して見られる特色である。

兵曹判書の行列には、車輪が付いている輶軒という輿が登場する。輶軒は車輪が一つで、車輪を支

える棒の上に椅子のような輿を乗せた形状をしており、長く伸びる轆を、前後各2人と真後ろ1人の計5人の輿かきが輿を支えて、前進させる（図12）。二品以上の官僚が利用できる乗り物であり、兵曹判書時を描く場面に相ふさわしいモチーフである。⁽⁶¹⁾「초헌박휘 구을리고 (軺軒の車輪を転がし)」、「쌍가마도 타게고나 (双轎にも乗れる)」という「男子歌」の叙述に忠実であるように、官職生活を表す場面は街を練り歩く貴人の行次（お出まし）の行列で象徴される。また、左議政の図には、従一品以上の官僚と耆老所の堂上官のみが乗ることができる平轎子という輦台が描かれている。⁽⁶²⁾退庁し、帰宅する左議政の行列を描いたようで、松明を斜めに背負う2人と篝火を焚く者が照らしている満月の夜道を、平轎子に乗った左議政一行が通行している（図13）。左議政は虎皮を敷いた平轎子に座り、追従の者が大きな芭蕉扇をかざしている。「男子歌」、「남자가」（「男子歌」）と「男児歌」に、「일품관면 등디키니 대신충의 숙연하다 (一品冠冕等待するに大臣の忠意が肅然する)」と詠み、一品の官職まで上っていくことを暗に示している。



図12 「判書行次」『慕堂平生図』部分



図13 「政丞行次」『慕堂平生図』部分

「男子歌」や「남자가」（「男子歌」）、「男児歌」の主人公は、神明の福祿を受け世に生まれた非凡な奇男子であり、高貴な人相を生まれ持ち、最も理想的な立身出世を成し遂げた男子と表現される。「平生図」は、そのような富貴と名誉に点綴された奇男子の人生を、時間軸に沿った通過儀礼と官職生活を最も象徴的な表現手段で選び出し、理想的な男性の一代記として構成したものと思われる。興味深いことは、中央図書館本の末尾に「平生」という表現が登場することである。歌辞の中の主人公は、老後に耆老所の霊寿閣に入り、奉朝賀として致仕する平穩な老年を迎えるが、このような人生を具寿榮紹介本と蔵書閣本は「어화 당부 싱어세하여 일싱힉낙 이리하세 (おお、丈夫が世に生まれ、一生の行樂がこのようなものである)」と締めくくっており、中央図書館本では「어화 대장뷔 싱어세키야 평싱힉낙 이밧기 더할소냐 (おお、大の丈夫が世に生まれ、平生行樂がこれより良いかな)」

と、丈夫の「平生」の行楽を詠んだものと記述する。人生の一代記を通過儀礼と官職生活に図式化した「平生図」の画題も、「男児歌」が歌う「平生」の行楽から倣ったものと見て間違いなかろう。以上のことから、「平生図」の成立の背景には、「男子歌」や、「남자가」（「男子歌」）、「男児歌」のようなハングル歌辞の流行が密接に結びついていると考えられ、「平生図」の制作も中央図書館本が筆写された1819年頃、即ち、19世紀前半であると推定できる。

(2) 「平生図」の文化的基盤——「男子歌」、「남자가」（「男子歌」）及び「男児歌」と中人文化

人の一代記を絵画化する「平生図」の制作の背景には、福祿の象徴として王室のみならず民間にも広く需要があった「郭汾陽行楽図」の流行があった。広通橋の近くにあった絵屋には「郭汾陽行楽図」が飾られていたという『漢陽歌』の内容は、王室や士大夫の需要ばかりでなく、より広範囲にわたり民間の需要があったことを示す。また、ハングル歌辞などにも、郭汾陽は幸運な人生のメタファーとしてたびたび引用され、『回婚慶祝歌』や具寿栄紹介本「男子歌」にも「郭汾陽を羨むことのない」福祿に満ちた人生が強調されている。

「平生図」のテキストと見なすことのできる「男子歌」の異本三種は、郭汾陽の人生を羨むことのない、男子の理想的な生き方が豊富に描出されている。男子の出生と賀礼、成長過程の修学と生活、婚礼及び遊興、科挙及第と官職生活、致仕など、男子の一生を叙述しているが、特に婚礼を挙げた後の各種の遊興の中に朝鮮後期漢陽の中人階層の遊興文化が登場することは、「男子歌」、「남자가」（「男子歌」）と「男児歌」の文化的基盤を考える上で特に注目に値する（表3を参照のこと）。

表3 「男子歌」、「남자가」（「男子歌」）及び「男児歌」の遊興表現

	具寿栄紹介本	蔵書閣本	中央図書館本
上元踏橋	○	○	○
三月三日花柳遊び	○	○	○
四月初八日燃灯節	○	○	○
夜の花柳		○	○
端午のブランコ	○	○	
狩猟と紅葉狩り	○	○	○
舟遊び	○	○	○

(具寿栄「男子歌攷」(『忠南大学校人文大学論文集』8巻2号、1981年)、박연호、『남자가』에 제시된 조선 후기 중간계층의 삶과 그 의미(『韓國言語文學』第65集、2008年)、이상원、『남아가』에 투영된 이상적 삶과 그것의 문화사적 의미(『민족문화사연구』42巻、2010年)を参照し、筆者作成)

具寿栄紹介本と蔵書閣本は、主人公が婚礼後に三月三日の花柳遊びを楽しむ様子を次のように歌っている。

(上略)

녹포화낭 세초식와 빅마금편 청나귀로 (緑袍花囊と細条帯で飾り、白馬金鞭に青驢馬に乗り)
 장악원 가진히적 용호영 별삼현을 (掌楽院の各様の奚笛と竜虎營の別三絃を)
 압뒤흐로 세우고서 빅화원 차저가니 (前後に立たせて百花園を訪ね)

(中略)

춤잘추는 침선비라 노리묘흔 의녀로다 (踊り秀でた針線婢に、歌の妙なる医女であり)
 시조의는 누잘놀노 잡소리의 저군일다 (時調は誰がうまいのか、雑歌に儲君あり)
 (下略)

掌楽院と竜虎營の楽師や針線婢の舞妓、医女の歌妓を伴い、時調と雑歌を歌う様子は『漢陽歌』に提示された別監たちの「承伝遊び」に類似する。⁽⁶³⁾ 掌楽院と竜虎營は本来宮廷と禁衛營に所属する音楽担当機関であった。掌楽院の音楽は宗廟祭礼、国王の行幸、王室の進宴、高級官僚の宴会など、王室の音楽的需要を担うためであったが、朝鮮後期になると、民間の音楽の需要にも応じるようになった。⁽⁶⁴⁾ 竜虎營の軍楽には吹打と細樂があるが、特に細樂は朝鮮後期になると民間で遊興的な音楽として受容され、一部では商業的興行まで行われていた。⁽⁶⁵⁾ このように王室の音楽や軍楽を担当する楽工と楽師が民間の商業音楽まで担当することになったのは、彼らに対する処遇の悪さに起因するが、いずれも興行に対する物質的な補償を前提に市井の伎楽の需要に応じたことは間違いない。⁽⁶⁶⁾ 特に竜虎營の伎楽を伴う宴会は主催者の大きな誇りで、竜虎營を宴会に呼べなかったことは恥とされるほどであった。⁽⁶⁷⁾ 英祖年間の閭巷詩人金成達⁽⁶⁸⁾は閭巷の伎楽について、「今の人は回甲寿宴に能力がなければそれまでだが、能力があれば必ず宴席を盛大に開き、伎楽を招き、奢侈で豪華なものにするために務め、人々の耳と目を楽しませる者が多い」と、嚴啓膺(1737-1816)の回甲宴に寄せた跋文の中で語っているが、当時、閭巷(民間)での伎楽の受容がかなり豊富であったことを物語る。⁽⁶⁹⁾ 雑歌は士大夫を中心に詠まれた平時調と異なる辞説時調を連想させるが、辞説時調は17世紀以降、中人階層が成立し、本格的に盛行され、中人階層を中心に創作・享受されていた。⁽⁷⁰⁾ 柳晩恭(1793-1869)の『歳時風謠』⁽⁷¹⁾の中にも中人の宴席で雑歌が詠まれていたことが次のように記されている。

杯盤爛処夜如何 (杯盤が爛漫な所に、夜はどれほど深まったのか)
 曲罷篇歌变雑歌 (歌曲が終わり、篇歌が雑歌の変調に入る)
 古調春眠今不唱 (古調の春眠曲は、今は唱わないが)
 黄鷄嗚咽白鷗哇 (黄鷄詞は嗚咽し、白鷗歌は目まぐるしい)

雑歌は、上の漢詩に現れる春眠曲、黄鷄詞、白鷗歌などがそれであるが、19世紀のハングル歌辞『漢陽歌』にも春眠曲、処士歌、漁夫詞、相思別曲、黄鷄打令、梅花打令が雑歌時調として別監の「承伝遊び」に歌われる。⁽⁷²⁾ このように雑歌は閭巷の歌辞として新たに流行していたことがうかがえる。遊興的で娯楽的な掌楽院や竜虎營の細樂を伴い、舞妓と歌妓と共に遊興を楽しみながら雑歌を詠む宴会は中人階層の最高の花柳遊びであり、中人階層の享樂的で消費的な生活を表している。

また、友人と共に上元踏橋に出た主人公が清溪川の橋を踏みわたり名月を楽しんだ後に、持っていた酒が尽きたので広通橋の近くの君七家という酒肆を訪ねる場面がある。中央図書館本はその箇所を次のように詠んでいる。

(上略)
 종뉴의가 청종고 광통교로 내려오니 (鍾路に行って鐘の音を聴き、広通橋に降りてきたら)

거리거리 음식이오 스름마다 인스로드 (町々に飲食で、人々はみな挨拶する)
가진 술이 다 진흐니 군칠이집 츠즈리라 (持ってきた酒が尽きたので、君七家を訪ねよう)
(下略)

君七家は柳晩恭の『歳時風謠』にも登場する酒肆のことである。

藉藉当年君七家 (往年の君七家、その名が広まり)
至今街肆借名多 (今は街の酒肆はその名を借りる所が多く)
西京冷麵松京炙 (平壤の冷麵と開城の焼肉を)
倣様來難奈爾何 (その味の真似が難しいのはどうするか)
(下略)

君七家は冷麵や焼肉を出す店で、夜になると酒灯をかけて営業した酒肆である。⁽⁷³⁾ 君七家がある広通橋の近くと雲従街(鍾路)の間には、中村と呼ばれる技術職中人と市廛商人などの富豪の居住地があった。⁽⁷⁴⁾ 中村で細樂と歌曲を楽しむ中人富豪らの生活は漢陽の風俗の一つとされるほどであったが、⁽⁷⁵⁾ そこにある君七家で酒を楽しもうとする「男兒歌」の主人公も、遊興に耽溺できる物質基盤の豊かな中人層であると推察できる。

また、中人階層の遊興と密接な関連があるものとして、蔵書閣本と中央図書館本には、線塵(錦織物屋)の裏通りにある妓房に三南中の名妓がいるとの話を捕盜軍官からささやかれ、妓房を訪れ、夜の花柳を楽しむ場面が登場する。

(上略)
친신하던 보두군관 귀예디여 흐느말이 (親信する捕盜軍官、耳に当てて言う事は)
엇그제 가든 창녀 삼남동의 명기라데 (一昨日に訪れた娼妓、三南中の名妓で)
두어친구 엮질너 밤화류가 엇더흐고 (二人ばかり友を誘い、夜の花柳は如何か)
선전뒤 갑흔골의 평디문니 그집일네 (線塵裏ガッポン村の平大門がその家であり)
(下略)

捕盜軍官は、別監、政院使令、技術職中人と共に漢陽の遊興を主導した階層であるといわ⁽⁷⁶⁾ れる。主人公は捕盜軍官の誘いで妓房を訪れ、時調と雑歌を楽しむほど、中人階層の人物と格別な関係を持っていたものと読み取れる。

中人階層の富を象徴的に叙述するもう一つの場面は舟遊びである。軍資監判官と広興倉の令が準備した船に乗り、主人公は龍山、サムゲ(麻浦)、幸州、楊花などの漢江の名勝地を遊覧しながら舟遊びをする。「男子歌」は次のように歌っている。

(上略)
강상의셔 오느편지 선유호즈 청흐엇니 (江上から届いた便りは舟遊びの誘い)

백사장 모라가니 청충마를 빗기타고 (白い砂原を走り、驄馬に曲がり乗り)
 군주판사 광흥녕은 비꾸며서 디령히니 (軍資判事広興令は船を飾り、待令し)
 상하직을 흘이져어 비단돛줄 높히들고 (竿を滑るように漕ぎ、絹の帆を高く張り)
 농산삼지 지난후의 양화형주 내려가니 (龜山麻浦を過ぎ、楊花幸州を下ったら)
 붉은달이 올라온다 (明るい月が上がってくる)
 (下略)

舟遊びは本来宮廷での遊興文化として伝承されていた。しかし、時代が下がるにつれ、奢侈な遊びと見なされたために宮廷や士大夫の間では徐々に禁止されるようになったが、19世紀に入り、富を築いた富裕な中人階層が舟遊びを主導するようになった。⁽⁷⁷⁾『漢陽歌』にも舟遊びは貢物房の遊びであると歌われている。貢物房は、良民が納めるべき年貢を肩代わりして国に治めた後、良民に利息をつけて取り立てる一種の高利貸し業であるが、「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」でも貢物房と密接な関連のある軍資監判官と広興倉の令が舟遊びの準備をしていたことは示唆に富む。

中人階層の中で、特に技術職中人の訳官たちは対清貿易で巨大な富を蓄積した者が多かった。⁽⁷⁹⁾京衙前は国家の行政力が弛緩すると様々な手段で国家の財政を私用し、もしくは吸収し経済的に浮上した。⁽⁸⁰⁾中央図書館本には主人公の富が「제택을 볼작시면 수백간의 갑제로고 전민을 혁여보고 일만석 옥토로세 (第宅をみると数百間の甲第で、田民を数えると一万石玉土である)」と叙述されているが、これは訳官出身の金漢泰の豪奢な生活ぶりを詠んだ李肇源の「大賈」という漢詩を思い起こさせる。⁽⁸¹⁾

(上略)
 宮室何宏麗 (宮殿のような家はどれほど宏麗なのか)
 服飾何革采 (服飾は如何に豪華なのか)
 居処与飲食 (住居と飲食は)
 奢侈冠一代 (一世の最上の豪奢であり)
 穹然数百間 (荘厳な邸宅は数百間)
 高明出闌闌 (市場に高く聳える)
 (下略)

漢詩の主人公の金漢泰は、訳官家門である牛峰金氏出身の塩商で巨大な富を蓄積し、純祖が金漢泰の邸宅が宮廷を凌駕するのを妬み、壊すことを命じたという言い伝えが残るほどの人物である。⁽⁸²⁾社会的身分は低いが、巨万の富を誇る訳官や富商の勢力を表すものとみてよかろう。また、閭巷詩人の姜彝天の詩の中には、宮廷の絵画制作を管掌する図画署の絵画が市井の商品として出回っていたことを示唆する内容もあり、王室や士大夫の嗜好や受容とは異なる新たな需要が形成されていたことがうかがえる。⁽⁸³⁾実際に金漢泰は金弘道の芸術の最大の購買者だったといわれる。⁽⁸⁴⁾「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」は、享乐的で消費的な都市遊興の中で生成されたものであり、その享受の背景には朝鮮後期、漢陽の生活と文化の変化を主導した中人階層が想定できる。⁽⁸⁵⁾彼らは遊興文化に対す

る肯定的な視角を持っていただけではなく、自負も持っている。このような視角を持った文化層が「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」を生成し、また「平生図」の制作と享受にもつながったのであろう。

一方、「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」はこのような富商を中心とする中人階層と密接な関係のある都市の遊興文化、そして盛大に祝福される通過儀礼が豊富に詠まれていると同時に、前章で触れたように、科挙及第と官職生活、致仕など士大夫文化が結合されている独特な様相を示している。現実的に、中人階層には到達できない士大夫の出世過程が「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」に詠まれ、またそれが「平生図」として絵画化されているのはどのように解釈すべきであろうか。

「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」の叙述は一貫して話者が直接経験した内容として綴られている。「神明の福」を生まれ持ち、「俊秀な容貌」の一代の奇男子であり、万代の福人である主人公は「汾陽の福祿が羨ましくない」ほどであると描写されている。郭汾陽、即ち郭子儀は二度も宰相を歴任し、救国の英雄として汾陽王に冊封され、85歳まで長生きしたばかりでなく、8人の息子と7人の婿も立身出世し、子々孫々唐朝最高の権門勢家をなした実在の人物である。⁽⁸⁶⁾「汾陽の福祿が羨ましくない」ほどの福祿に満ちた「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」の主人公は、まさに官福と財福、子孫福をすべて享受した人物として、吉祥の祈福信仰の対象になった郭汾陽の姿と重なる。朝鮮時代の普遍的な幸福の指標は長寿、富、健康、権勢、そして子孫の繁栄の五福であり、それは様々な占トと風水にそのシンボルと結晶を求められた。⁽⁸⁷⁾朝鮮時代に広く読まれ、また信仰された風水地理書である『青烏経』には、「山があり、水が曲がりくねる所に墓を構えると子孫は千億であり、水が西を通り、東の方に流れる所に墓を作ると財宝が無窮になり、水が三回くねり、四回目に流れる所に墓を建てると官職がさらにあがり、くねり動く蛇が水辺の沙のように水が重なりあって交鎖する所に墓を構えると最も高い官職に就く」と説いている。⁽⁸⁸⁾朝鮮時代には、五福の中でも官運を最も重要視していたことが分かる。「男子歌」と「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」で歌われた一品の官職まで上り詰める主人公は、まさに郭子儀の人生の見立てであり、吉祥のメタファーである。それを絵画化したのが「平生図」であり、郭汾陽の人生が羨まない理想的な人生を反映しているのである。そのイメージは男子歌や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」の文脈から持ち出され、福祿の象徴として享受層に共感され、支持されていたと思われるのである。

実際に中人は法律で規定された社会階層ではなく、社会慣習で形成された用語であるので、その範疇が明確に合意されていなかった。技術職中人は編校、計士(算員)、医員、訳官、日官(天文官)、律官、唱才(通礼院所属)、賞技、写字官(承文院所属)、画員、録事などがあげられる。彼らは雑科試験を通して選ばれた技術官員であり、皆が東班正職に属するものである。⁽⁸⁹⁾中人が具体的に両班と区別される権利上の差は清頭職に任命されないことであり、それが技術職中人の持つ最大の不満であった。⁽⁹⁰⁾清頭職は技術官庁でない六曹と三司などの一般の官職のことで、宰相の地位に上るのに身分的制約を受けない官職である。しかし、司訳院、典医監、内医院、観象監に所属している訳官、医官、天文官などは実職として正三品堂下官まで昇進し、惠民署、図画署、戸曹、刑曹に所属する医員、画員、算員、律官は従六品で終わるようになっている。⁽⁹¹⁾このような昇進制限を限品去官というが、制度上は技術官員も清頭職に上がる道が開かれていた。『経国大典』礼典奨勸條には、医学習読官、律

員、筭員として職務に精通している者は頭官や京外の吏職に除授するとの規定があった。この規定は『大典通編』と『大典会通』にもそのまま継承され朝鮮王朝を通して一貫して維持されたものである。もう一つの道は技術官員の文武科応試である。歴代の法典には技術官員の文武科応試を規制する条項は何もないのである。しかし、法典で規定されている法的地位と権利は現実的には履行されなかった。結局、両班だけが承文院や宣伝庁のような出世の早い官庁に配属され、また中人には地方守令に任命される機会すらも殆どなかった。このような現実的な差別に対する強い不満が中人階層を「通清」運動に導き、彼らは清頭職に同等に就くことができるよう懇願していたのである⁽⁹²⁾。

「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」を視覚化した「平生図」に示された華麗な官職生活は、朝鮮後期、特に19世紀においては京華士族の門閥家に独占され、現実的には中人階層は、高位の官職には届かない制約に縛られていた。「平生図」は、このような制約がある中で中人階層が夢見た一生、即ち、生まれながらにして五福に恵まれ、科挙に及第し、清頭職に進出し、最高の官職に上り詰めることを描いているといえる。このように、「平生図」にみる官職への願望の背景には、巨大な富を築き、経済的な権力集団として台頭し、物質的な豊饒を謳歌していた閭巷人、即ち中人階層があったと想定できる。「平生図」を享受していた階層は、都の漢城を背景としながら、物質的消費の上に奢侈で洗練された教養も持ち合わせていた閭巷人であり、彼らの求める理想的な一生を視覚化したものが、「平生図」であったと考えられるのである。

終わりに

「平生図」は、8曲ないし10曲屏風に、初誕生の祝いから始まり、成長した子供の婚姻儀礼、そして科挙に及第し、最高位の官職に就く内容を順次描き、最後は大勢の子供から祝福を受けながら婚礼を再現する回婚礼や回榜礼を1扇ごとに配置し、いわば、通過儀礼と立身出世の過程を図解し、一代記を表す構成で仕立てられている風俗画である。中には、慕堂洪履祥や澹窩洪啓禧の一生を描いたとされる作品が存在するが、屏風絵や添付された記録と彼らの一生及び官職が一致しないこと、また、19世紀における両家の事情からみても慕堂洪履祥や澹窩洪啓禧の一生をモデルとした作品とは見受けられない。即ち、「平生図」は特定の人物の功績を称え、一生の重要な官職を記録として残すために制作されたものではなく、当時の人々が最も福祿に満ち、幸福な人生とされる出来事を形象化したものである。

本稿は、朝鮮時代の後期、19世紀の制作とされる「平生図」の成立について、「郭汾陽行楽図」のような吉祥図の影響や19世紀に流行した歌辞作品、特に『回婚慶祝歌』や『回婚參慶歌』、「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」、『漢陽歌』などとの関連を指摘した。「平生図」の制作の背景には、19世紀に民間に広く流行し、富貴功名と寿福康寧、子孫繁栄の祈福的象徴性が強調された郭汾陽行楽図の影響が絵画制作の底辺にあったと考えられ、祈福の念願と結びついた郭汾陽の絵画化は、18世紀後半から豪華に行われ始めた回甲礼や回婚礼と結びつき、人の一代記を表す主題へと発展した。「平生図」が通過儀礼と官職生活を一つの主題として構成することになったことについては、「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」のような、男性の理想的な一生を表現するハングルの歌辞文学が基盤となっている。「平生図」を構成するイメージは「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男兒歌」

「男児歌」の文脈から導き出され、また、「平生図」という画題も「男児歌」にその典拠を求められることも注目に値する。

「男子歌」や「남자가」(「男子歌」)、「男児歌」は、『漢陽歌』と共に 19 世紀以降漢陽の中人階層の生き方や現実認識、そして遊興の文化を表すものとして重要であり、「平生図」はそのような中人を基盤として生成された絵画であった。それは、対清貿易などで物質的な繁栄を手にし、新たな時代の潮流を肯定し、特有な文化を創出していた中人階層が、福祿のメタファーとして子々孫々そのような幸運な人生が持続されることを祈願して制作したと思われる。そしてそのイメージは彼らが理想とする五福を備えた人生として立身出世し最高の官職に上り詰めた姿に感情移入し、理想と欲望が叶えられることを祈願する祈福のモチーフとして鑑賞する絵画であったと思われるのである。

注

- (1) 이태호 『風俗画 (I)』 (대원사, 2002 年)、15-16 頁。
- (2) 이태호、前掲書、23-24 頁。
- (3) 陳準鉉 『檀園金弘道研究』 (一志社、2008 年)、402 頁。
- (4) 崔誠希 「19 世紀平生図研究」 (『美術史学』 16 号、2002 年)、107 頁。崔誠希 『朝鮮後期平生図研究』 (梨花女子大学校大学院碩士論文學位論文、2000 年)、95-96 頁。京華士族は代々漢陽に居住しながら高い官職に就いていた裕福な兩班を指す。
- (5) 原文には古ハングル体のみで表記されているため、本論では原文通りの表記と漢字表記を併記する。但し、蔵書閣本の「男子歌」とは異本である。
- (6) 崔誠希、前掲碩士學位論文、8 頁に個人蔵の「平生図」を掲載しているが、現所蔵は不明である。
- (7) 陳準鉉、前掲書、404 頁。崔誠希、前掲碩士學位論文、2 頁。
- (8) 陳準鉉、前掲書、403 頁。
- (9) 李東洲 「金弘道이라는 画員」 (『月間亜細亜』 3 月号、1969 年)、186 頁。
- (10) 陳準鉉、前掲書、408 頁。陳準鉉は画風の特徴からも金弘道の真作であると主張する。
- (11) 陳準鉉、前掲書、408 頁。
- (12) 陳準鉉、前掲書、407-409 頁。
- (13) 崔誠希、前掲論文、81 頁。
- (14) 『幽玄齋選韓國古書画図録』 (幽玄齋、1996 年)、58-63 頁。
- (15) 陳準鉉、前掲書、405-409 頁。
- (16) 陳準鉉、前掲書、405-407 頁。
- (17) 陳準鉉、前掲書、403 頁。
- (18) 陳準鉉、前掲書、403 頁。
- (19) 崔誠希、前掲論文、85-86 頁。
- (20) 崔誠希、前掲論文、86-90 頁。
- (21) 崔誠希、前掲論文、90-92 頁。
- (22) 오주석 『단원 김홍도』 (솔출판사、2008 年)、174-178 頁。
- (23) 洪履祥が「慕堂平生図」の主人公として選ばれたことについては、彼が親孝行した息子として名を馳せ、親孝行の重要性を後世に伝えるため多くの契会図を制作し、結局は士大夫社会にその功績が認められ、平生図の最初の主人公となったとする説もあるが、資料の根拠も乏しく、推測の域を超えない。허경진 「그림과 작품을 통해 본 洪履祥의 한평생」 (『洙上古典研究』 第 42 集、2014 年)、151 頁。
- (24) 慕堂洪履祥の家門については、主に召영민 「英・正祖代豊山洪鳳漢家門의 부흥과 분열」 (『史学研究』 100 号、2010 年) 及び이군선 「豊山洪氏門中の家門意識——洪良浩와洪敬謨를 중심으로」 (『漢文教育研究』

- 第 43 号、2014 年) を、澹窩洪啓禧については、정만조「澹窩洪啓禧의 家系분석」(『조선시대의 정치와 제도』, 집문당、2003 年) 及び金承大『澹窩洪啓禧研究』(円光大学校大学院博士学位論文、2007 年) を参照した。
- (25) 이군선、前掲書、472 頁。
- (26) 원창애「儒臣홍이상의 학업과 관직생활」(『열상고전연구』第 42 集、2014 年)、176 頁。
- (27) 김영민、前掲論文、141 頁。
- (28) 김영민、前掲論文、154-155 頁。
- (29) 김영민、前掲論文、141 頁。
- (30) 김영민、前掲論文、169 頁。
- (31) 김영민、前掲論文、170 頁。
- (32) 김영민、前掲論文、170 頁。
- (33) 김영민、前掲論文、170-171 頁。
- (34) 金承大、前掲学位論文、170-176 頁。
- (35) 金承大、前掲学位論文、176 頁。
- (36) 金承大、前掲学位論文、203 頁。
- (37) 金承大、前掲学位論文、203-205 頁。
- (38) 金承大、前掲学位論文、205 頁。
- (39) 金承大、前掲学位論文、206 頁。
- (40) 崔誠希、前掲論文、103-107 頁。
- (41) 金紅男「중국『郭子儀祝寿図』연구——연원과 발전」(『미술사논단』33、2011 年)、169 頁。
- (42) 「八子七婿皆貴顯朝廷諸孫數十不能盡識至問安但頷之而已」(「郭子儀列伝第六十二」、『新唐書』、台湾商務印書館、1967 年)、16963 頁。
- (43) 『題郭汾陽行樂図』「功業崑福祿絲管高堂列子婿華筵倍漢唐無与汾陽比主不為疑衆不猜」、『題郭子儀行樂図賜王子』「古來完福郭為先子婿諸孫盡在前図与此偶爾」(『奎章閣資料叢書文学篇列聖御製二』、서울大学校奎章閣、2002 年) 387 頁、319 頁。
- (44) 1802 年(純祖 2) 8 月に行われた純祖と純元后の嘉礼に初めて「郭汾陽行樂図」8 曲屏風が制作され、使用された。その後、1851 年(哲宗 2) 9 月に行われた哲宗と哲仁后の嘉礼、1866 年(高宗 3) 3 月に行われた高宗と明成后の嘉礼、1883 年(高宗 20) 2 月に行われた純宗と純明后の嘉礼にも「郭汾陽行樂図」が使用された。한영우『조선왕조儀軌——국가의례와 그 기록——』(일지사、2005 年) 459-464 頁、591-593 頁、628-642 頁、668-672 頁。金紅男「한국『郭子儀祝寿図』연구」(『미술사논단』34、2012 年)、75 頁。
- (45) 宋申用校註『한양가』(正音文庫、1948 年)、63 頁。
- (46) 「(上略) 鐘路같이 너른 상에 三角山을 개어올려 앞앞마다 전할 적에 감홍노 세다주를 琥珀대모 瑠璃잔에 (中略) 분양왕에 복역인들 이에서 더할소냐 (下略)」金聖培他編著『註解歌辞文学全集』(精研社、1961 年)、548-552 頁。
- (47) 姜寬植『조선후기궁중화원연구 <하>』(돌베개、2001 年) 122 頁。
- (48) 崔誠希、前掲論文、93-94 頁。
- (49) 李采「題徐聖可(簡修)画屏後」右一疊：岸巾而当座子非焦先生挾冊而踵門誰是孫秀才他時名碩要皆出此類信乎得英才教育為一樂。右二疊：彼冠儒而服儒者一何忙個個竜門有奪錦袍意思孰能移学芸干仕進之心以收其心美其身。右三疊：壯元試三場固不義王文正聞喜宴一花独不聞司馬公世路難平人心易危吾知其憂甚於喜。右四疊：禁林曉月青驢赴公論思諫諍所料理者何事凡百有位各善其身慎勿入此公袖中彈文。右五疊：火城輝煌安車委蛇金門曉漏相君其有思乎苟其進仙仙退泄泄伴食中書將焉用彼相哉。右六疊：角巾東門浩然而歸送者幾人車幾兩馬幾匹不待太史氏鋪張其事可知賢大夫行裝。右七疊：范蠡五湖之舟歟張翰秋風之棹歟進而挾巖廊退而挾江湖都是分內急流勇退去神仙不遠。右八疊：趣壳金供具樂与郷党宗族共享聖主之賜鵲犬疎籬依旧作布衣家計夢不到西江風浪。『韓國歷代文集叢書華泉先生文集二』(景仁文化社、1999 年)、92-94 頁。

- (50) 「城市全圖七言古詩百韻」の中、「貧者求錢賤求仕」(『靑莊館全書』卷二十、民族文化推進会、2000年) 278頁。
- (51) 崔誠希、前掲論文、95頁。
- (52) 「玉屑華談」は異本により「玉屑歌」、「玉屑和答」、「玉屑和答歌」などとも称された。権純会「『玉屑華談』의疏通様相과通俗性」(『어문연구』37、2009年)、107頁。本稿では、「玉屑和答歌」(金聖培他編著『註解歌辞文学全集』、精研社、1961年)及び、権純会の前掲論文を参照した。
- (53) 金聖培他編著、前掲書、555頁。
- (54) 権純会、前掲論文、117頁。
- (55) 筆者の調査による。他に、박연호「『남자가』에 제시된 조선후기 중간계층의 삶과 그 의미」(『韓國言語文学』第65集、2008年)、268頁にも収録されている。
- (56) 이상원「해제: 古歌謠記抄에 대하여」(『註解古歌謠記抄』、보고사、2009年)、10-12頁。
- (57) 이상원、「『男兒歌』에 투영된 理想的 삶과 그것의 文化史的意味」(『민족문화사연구』42권、2010年)、237頁。
- (58) 「男子歌」の異本三種の引用に当たり、「男子歌」と称した場合は、最も早い作例とされる具寿榮紹介本を指す。引用する部分に行の錯綜などは認められるが、描写の内容が変わらない場合は具寿榮紹介本「男子歌」と称し、三種の異本に共通する内容であることを意味するが、諸異本独自の内容や蔵書閣本と中央図書館本を引用する場合は本文中に明記する。
- (59) 探花郎は朝鮮時代の科擧試験で甲科に三番目の成績を収めた人を指し、同接は同じところで一緒に修学した人を指す。
- (60) 정연식「조선후기 탈 것에 대한 규제의 변화」(『조선후기 서울의 사회와 생활』、서울학연구소、1998年)、253-254頁。
- (61) 정연식、前掲論文、251頁。『한양가』にも兵曹判書のお出ましの際に輶軒を押しながら進む行列の威厳を次のように表している。(宋申用校註、前掲書、24頁)「(上略) 호기잇는 두사마는 빅보밧게 인비세고 건장한 너즈괴슈 원앙진 죽디며여 쌍쌍이 벽제소리 날니고도 영열하다 외박휘 읊흔초헌 키큰 구종드리 손을드러 미러갈제 죄우의 식구견비 호한한 별비드리 날기로 버려서서 (下略)」。
- (62) 정연식、前掲論文、250頁。平轎子に乗った政丞の行次は『漢陽歌』にも登場する。(宋申用校註、前掲書、23頁)「(上略) 의정부 삼상네는 이민하스 ㅎ는모양 평교조 느즌줄의 나즌키 별구중이 고이며여 가 오실제 호피소리 짜를판다 디로겨른 과쇼연을 히빋을 반증가려 벽제도 크지안코 형보도 완완하다 (下略)」。
- (63) 内医院や惠民署の医女と工曹と尙衣院の針線婢は、教坊の妓女が足りない場合、妓女として呼び出された官妓である。柳得恭『京都雜志』(姜在彦訳注『朝鮮歳時記』東洋文庫193、平凡社、1971年)、260頁。「承伝遊び」は別監たちが官衙の楽師や官妓を伴い、詩調や踊りを楽しむことである(박연호、前掲論文、270頁)。
- (64) 강명관「조선후기 서울의 중간계층과 유흥의 발달」(『민족문화사연구』2권、1992年)、184-185頁。
- (65) 강명관、前掲論文、185頁。
- (66) 林熒澤「18세기 芸術史의 視覚——柳得恭作『柳遇春伝』의 分析」(『李朝後期漢文学의 再照明』、創作과 批評社、1983年)、172-175頁。
- (67) 林熒澤、前掲論文、176頁。
- (68) 閭巷人は、委巷人とも呼ばれた兩班士大夫以下の中人階層を指す(고동환『조선시대 서울도시사』、태학사、2013年、195頁)。中人は、医官、訳官など技術職を初めとして庶孽(兩班の妾子)、吏胥(胥吏または衙前)などで構成された下級官僚群を指す。彼らは朝鮮王朝が朱子学を国学として受け入れ、その理念を实践する過程で兩班身分から淘汰され、中人という身分として分化・固着されたという(鄭玉子「朝鮮後期の 技術職中人」、『震檀學報』、61号、1986年、45頁)。また、中人という用語が広く用いられるようになったのは17世紀以降である(韓永愚「朝鮮時代中人의 身分・階級的性格」、『韓國文化』9、서울대학교韓國文化研究所、1988年、181頁)。

- (69) 林熒澤編『閭巷文学叢書』2 (여강출판사、1986 年) 708 頁。「今俗之人於回甲寿宴無力即已有力即必大張宴席挾伎樂而務令奢華悅人耳目矣」、閭巷詩人嚴啓膺 (1737-1816) が編纂した『錦衾記実詩』(写本一冊、国立中央図書館蔵) の中の一編である「葉塢家藏抄」に所収される跋文から抜粋。
- (70) 강명관、「사설시조의 창작향유층에 대하여」(『민족문화사연구』4 권、1993 年) 参照。
- (71) 柳晩恭『歲時風謠』(筆写本、延世大学校国学資料室蔵)。
- (72) 「(上略) 춘면곡 처소가며 어부스 상스별곡 황계타령 비화타령 좁가시조 듯기쵸타 (下略)」、宋申用校註、前掲書、83 頁。
- (73) 下略のところに「酒燈高掛板門開、一卓紛然碗櫝杯」の表現がある。柳晩恭、前掲書。
- (74) 강명관、「조선후기 서울과 한시의 변화」(『민족문화사연구』6 권、1994 年)、95 頁。林熒澤、前掲論文、177 頁。
- (75) 林熒澤、前掲論文、177 頁。
- (76) 강명관、「조선후기 서울의 중간계층과 유흥의 발달」(『민족문화사연구』2 권、1992 年)、189 頁。
- (77) 李亨大、『한국 고전시가와 인물형상의 동아시아적 변전』(소명출판、2002 年)、192-206 頁。
- (78) 宋申用校註、前掲書、67 頁。
- (79) 강명관、「조선후기 서울과 한시의 변화」(『민족문화사연구』6 권、1994 年)、95 頁。
- (80) 강명관、前掲論文、95 頁。
- (81) 林熒澤、『이조시대 서사시』1、(창비、2013 年)、319-326 頁。
- (82) 강명관、前掲論文、96 頁。
- (83) 강명관、前掲論文、96 頁。
- (84) 강명관、前掲論文、96 頁。
- (85) 藏書閣所蔵「남자가」は『남자가』と表題されている筆写本の中に収録されている。筆写本の最後に付いている書簡文の末尾には「甲寅三月十六日舍弟聖躋上書」と記されている。聖躋という人物については、박연호は書簡に「行く際にあなたの兄と金別監をお願い申し上げたことを」という内容から、書簡を書いた人は別監と関連のある人物であると推定する。박연호、前掲論文、268 頁。
- (86) 『新唐書』卷一三七、郭子儀列伝 (台湾商務印書館、1967 年) 16960-16964 頁参照。
- (87) 신동원『조선사람의 생로병사』(한겨레신문사、1999 年)、64 頁。
- (88) 「山頓水曲子孫千億、山走水直從人寄食、水過西東財宝無窮、三横四直官職彌崇九曲委蛇準擬沙提重重交鎖極品官資、氣乘風散脈遇水止藏隱蛻富貴之地」、崔昌祚訳注『青鳥經・錦囊經』(民音社、1993 年) 23 頁、影印原文 304-303 頁。なお、『青鳥經』は、雜科試験の陰陽科 (天文学、地理学、命課学) 初試の科目に入っている。『経国大典』礼典卷三 (서울大学校奎章閣、1997 年)、225-226 頁。
- (89) 韓永愚「朝鮮時代中人의 身分・階級的 性格」(『韓國文化』9、서울大学校韓國文化研究所、1988 年)、181 頁。
- (90) 韓永愚、前掲論文、192 頁。
- (91) 韓永愚、前掲論文、192 頁。
- (92) 韓永愚、前掲論文、192-195 頁。